

文明災の時代における人間の条件について

——発表へのコメントと討議

中村隆之, 田口卓臣, ロベルト・テッロージ

○土肥 「原発禍からコロナ禍へ—連鎖するカタストロフィを考える」との企画に際し、原発禍からコロナ禍へ、もはやカタストロフィはサイクル化し、災禍は人類の文明に内在するものと捉えざるを得なくなったとの認識が、まずありました。こうした現実を前に、三者をお迎えし、思想の停滞を打ち破りたいとの思いが生まれました。その三者とは、最近韓国語訳も出た『脱原発の哲学』の共著者として知られる田口卓臣氏、『イタリアン・セオリーの現在』でオルタナティブな現代思想の地平を日本から発信するロベルト・テッロージ氏、万人が読むべき『野蛮の言説』によって、人為の厄を思想の流れにおいて読みとこうとした中村隆之氏です。こと中村氏に関しては、「野蛮な」非理性の言説すらことばたらしめる力をもつ、ことばのひとつ、としてコメントーターにお迎えしています。田口卓臣氏の発表「〈人間〉を超え出づるものたちに関する二、三の注釈——核と疫病を手がかりとして」とロベルト・テッロージ氏の発表「パンデミックから災害まで：人類のリスクを哲学する」に対し、中村隆之氏に、コメントとして注釈いただきたいと思えます。

○中村 中村です。

最初に土肥さんから、今回の登壇者の紹介をいただいたときに、私は「言葉の人」という、やや過分なご紹介に預かり、恐縮しつつもうれしく受け止めています。今回はこのようにオンライン開催ですけれども、私たち4人はこうやって並んで座っているんですね。先ほど伺ったら、立命館のこの連続講座で登壇者が全員現地に集まったのは今回が初めてだそうです。考えてみると、田口さんにせよ、私にせよ、ふだんは勤務先が東京ですので、合理的に考えれば、Zoomで参加ということもあり得たわけですが、にもかかわらずここに来てしまった。来てしまったのは、例えばそれぞれ考え方は違うかもしれませんが、個人的には、テッロージさんがどんなふうにしゃべるんだろうというのを実際聞いてみたかった。初めてお会いします。田口さんに関しては、恐らく10年ぐらい前にお会いしたのが初めて[*実際には2016年4月8日(金)に東京駅近くの八重洲ブックセンターで『脱原発の哲学』と『怪物的思考』の出版記念イベントに参加して知己を得た]、以来、長らくお会いしていません。ただ、会ったときに互いにすぐに認識できたのだから不思議です。土肥さんとは、立命館に来るときに比較のお会いできる、そういう間柄です。以上はただの前置きですけれども、今日のコメントとも少し関わるところがあるかもしれないと思い、お話しした次第です。

お二人のコメントは、私なりの受け止め方ですが、21世紀における人間存在を問うものだと捉えています。今からお話するコメントに仮にタイトルをつけるとすれば、「カタストロフィ(あるいは文明災禍)の時代における人間の条件について」とでも題することができるのではないかと思います。

田口さんとテッロージさんの非常に濃密なご報告を伺い、内容に問題なくついていった専門家や同業者の方も当然いらっしゃると思いますが、もう少しかみ砕いて内容理解を深めたいという方もきっといらっしゃるのではないのでしょうか。かく言う私も、哲学や思想を専門としているわけではありませんので、お二人の話がどういうものだったのかというのを私なりの視点で再確認することにまずは比重を置いてコメントし、その上で論点を示したいと思います。

最初の田口さんのたいへん啓発的なご発表については、何よりレジュメが参考になります。本当に様々な論点が提示されており、これをまとめ切るのは私の力量ではなかなか難しいわけなのですが、こういうことが言えるのではないかと、というのを大雑把にまとめてみます。

まず、文明に内在する災禍、すなわち文明災という用語によって原発事故と現在の新型コロナウイルスのパンデミック、この2つを相関的に捉える視点、これがポイントだったと思います。

その文明災、つまり原発事故、核災害とパンデミック（疫病）、これに関わる2つの論点があった気がしています。これは気がしているというだけです、場合によったら「それは間違っていますよ、中村さん」と後で言ってもらえるでしょうか（笑）。

一つは、「私たち」と言うとき、この「私たち」って誰だろうということが気になりました。これは人類が主語なのかな、とまず思いました。あるいは、人類でなくとも政治的な集合、下位区分の集合としての国民といったものが想定された「私たち」といった、そういうことなのかなとも思いました。一部の学者の様々な予告があったにもかかわらず、この2つの文明災の問題を先送りしてきたのは誰かという、まさしく「私たち」だったわけです。まずはこの主語の問題ですね。

いま一つは、統治権力の問題としてまとめておきたいことです。原発事故とパンデミックに共通するのはフーコー流の権力の人口管理であり、先ほどの『脱原発の哲学』の用語で言えば「セキュリティ権力」と捉えられる位相があると思います。

そして、私たち、人類なり国民というものは、この統治権力の中にすっかりからめ捕られてしまっている、そういう生活を送っているんだとまとめることができそうです。

では、そのように統治権力からめ捕られている私たちは、どのような社会を生活しているのかというと、それは一言で言えば、健康を再重視する社会だと言えるのではないのでしょうか。先ほど差別の問題について、隔離の話が出てきました。Isolationという言葉で述べられていた部分です。健康を重視する社会は、優生学的な思想と非常に調和的ですから、自分の身体のリスクというのは当然そうですけれども、あらゆるリスクを排除していこうとする。そうして生かしていくわけですが、では、生かしていくのとは逆に死んでいい人たち、あるいは、そうした現在の統治権力の中にからめ捕られた私たちの中に、「私たち」から排除され差別される人たちをつくっていく、そういう構造があるわけですね。

ただ、その一方で、リスク管理社会には制御不能なものとして、いま問題としている、文明災がある。核災害、これはご報告にあったように、福島第一原発のメルトダウンに伴って現在でも二号機建屋は毎時数十シーベルトある。疫病も現在は終息に向かっているかに見えますけれども、未来が予測不能であると同じように、結局のところ、制御不能だと言える。

では、私たちのこうした制御不能な人間環境を別の言葉ではどう言い直せるのでしょうか。「外部なき人間環境」と言えるのではないのでしょうか。これはレジュメの「[人間]の住む場所に「外

部」はあるのか？」という箇所に関わります。気候変動、核災害、生物多様性の破壊が幾つかの事例を基に確認されていたわけですが、これについては、気候変動、環境問題に比較的関心のある人であれば、人新世や Anthropocene という用語で捉えられる問題意識の中ですねとなりと受け止められるでしょう。人間中心主義的な価値観を問い直していく方向に進めば「外部なき人間環境」という捉え方は、そうした問題意識の中で当然出てくるだろうと。

その中で、しかし興味深いのは、人間は地球への寄生種なのだという指摘です。この意味で人間はウイルスと同じなのだという指摘や、またお話の中で生と死の概念の境界が曖昧になっていくような時間軸が設定される、そうした話も出てきていました。

ただ、その辺りはうまくまとめ切れなため、「では、どうすればよいのか？」というレジュメの最後に田口さんがお話しになっていたことに話を進めます。これは、文明災における人間の在り方の考察だとひとまず受け止めました。接触は距離を消失させてしまう行為であり、その端的な行為とは何かを摂取することであり、その摂取と排泄の原動力としてクローズアップしてくれたのが食欲でした。

しかし、この食欲の中には人間独特の過剰さがあると、そのように述べていました。生命活動を維持しようとする限り付きまとう——これは田口さんの言葉ですが——過剰な消費がある、廃棄がある、汚染がある。人間という種の過剰な本性、これをどうにかしなくては問題の解決の糸口は見つけられないのではないかという、そういう方向へと話は進んでいったと思います。

以上、不十分なまとめでした。

さて、その上で聞いてみたいことがあります。

主に人間についてなのですが、1点目は、食欲という摂取、排泄の原動力のレベルで、人間を「過剰な本性」と捉えていらっしゃることにについてです。人間にはそうした過剰とも言える本性（すなわち自然とも本性とも訳せる nature）がある、と規定されていました。この過剰な本性は、壊れた本能とも言い換えられていたわけですが、人間の本性をどう捉えるのか、についてはテッロージさんの報告に対するコメントとしても伺いたい点です。なぜならテッロージさんのほうは人間本性をロゴスのほうに見ていたわけですから、この人間の本性とは何かが結局のところ、お二人にお伺いしたいことです。

その点を指摘した上で、田口さんのご報告の問いかけを踏まえるならば、人間のこの過剰な本性（nature）が文明災の根本原因であるのかどうかは気になるわけです。文明災の根本原因が人間の過剰な本性にある場合、人類の文明災禍に対する制御不能状態は、人類の生存に内在する過剰な本性としての制御不能——過剰な本性そのものが制御不能なのですが——とアナロジーで捉えられると思うんですね。

この方向で考えるならば、この本性を根本的に変える必要があるという意味では、例えばかなり遡りますけれども、ジャン＝ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』が参考になるかもしれません。ルソーは其中でまさしく文明に染まっていった西洋人を問題としている。そのときに純然たる自然の状態のようなものをユートピア（すなわちフィクション）のように設定したわけですが、そうしたユートピアへ立ち戻っていく、自然状態に戻って過剰性をなくしていくというような、そういう努力をするべきなのかどうかということですね。

ただ、これは恐らく現実的ではないと思います。重要なのは、このユートピアの有する現状

批判の力のほうだと思えます。この意味でもう少し現実主義的に受け止めるならば、というよりも、明らかに田口さんはそうお考えなのですが、人間の過剰な本性は文明災という時代認識において際立ったというふうに捉えているのだと思われまます。すなわち、私たちを取り巻く効率的な生産、資源の搾取がもたらす大量生産や大量消費社会における例えば食の過剰という問題があります。コンビニ弁当を例に取ればわかるとおり、大量消費社会はそのまま大量ごみ社会でもあるわけですね。こうした社会が作り出した欲望が過剰な本性に影響を与えているのだとすれば、社会改良の方向に希望が見いだせまます。この社会改良とともに人間の欲求の在り方を変えていくということがあり得るのではないかどうか、といったことが最も伺いたい点です。

また、文学の例を出してくれました。大江健三郎、古井由吉、中上健次といった作家ですけれども、私は食欲の話聞いて、アントナン・アルトーをふと思ひ起こしました。アルトーには食と舌のわい雑さを話題とするテキストがあり、食べるという行為自体をもっと分解して考えていく。それが肛門に結びつくとか、幻想的な生殖に結びつく問題とか、いろいろあるんですけども、いずれにせよ、かむとか、飲み込む、舌を使う、なめるというふうには、食べる行為を分解して考えてみたときに、何かまた着想が見いだされるのかどうかというのは、私自身取り立てて考えてみたことはなく、半ば思いつきのようなコメントになります。

次に、時間の関係もありますので、テッロージさんの報告のほうに話を進めまます。

テッロージさんのご報告のほうは、論点・視点が全くふれずに展開されていて、襟を正しながら聞いていた感じなんですけれども、言ってみれば、少々隠語のような言葉遣いになりますが、アドルノ的な現代社会批判の立場、あるいはハイデガーの技術批判の立場から今日の人間の在り方を論じたご報告だと受け止めまました。

最初に、AI、人工知能に見られる人間の存在論的リスクという問題意識を打ち出されていまました。この問題意識を踏まえると、人間それ自体が既にもはやカタストロフィを迎えているのではないかという深刻な問いに行き着きまます。その上で、存在論的人間学においては、本性というものを2つに分けられるのだと。一つは感情的、動物的な本性、自然のほうであり、いま一方は理性的な本性である。西洋の哲学史においては「人間が人間となるためには、動物的本能を抑制し理性に訴える」という理性中心主義というものを形成してきた。しかし、近代の理性的主体の圏域から徐々に自律し、完全に統御不能になったのが現代の資本主義市場だと、そういうふうにおっしゃっていまました。自己目的化して発展を遂げる資本主義市場は、工学的技術、経営学、コンピューター技術、情報学、さらには人工知能を生み出すようになった。こうしてポストヒューマンなテクノロジー世界が出現して、今、私たちを取り巻いているということですね。

この人工知能システムの登場による人間における理性の弱体化というところ、特にロゴスに関わる能力の弱体化というものを恐らくテッロージさんは相当な危機意識を持って受け止めていらっしやる。こう述べておられました。「メディアは注意を分散させ、長く複雑な議論を追う集中力を減退させてしまふ。だが、西洋文化の発展のすべてはロゴスの組み立てに結びついているのである」と。こうした人間理性の価値の低下とともに、アニマリズム哲学が注目されたりとか、身体と健康に対する個人の関心が高まってきたと。そして人間がある意味「動物化し

ている」,あるいは、幼児化しているという指摘もあったと思います。

こうした理性が弱体化した人間世界に起きたパンデミックについて、その後考察を進めていったわけなんですけれども、これから私がテッロージさんにしたい質問というか、提出したい論点というのは、このパンデミックの話の手前あたりでひとまず完結すると思いますので、コメントは一応用意はしていますが、そこは省きます。

2つ、テッロージさんに伺ってみたいことがあります。

1つ目はもう既に実は言ったことですが、田口さんの発表にあった人間独特の過剰さに関する見解を伺ってみたい。改めてですけれども、人間本性の力点の置き方が、田口さんの場合には本能、しかし、この本能は壊れているというようなもう一度省察が加わった、そうした本能に力点を置いている。対してテッロージさんは、理性に力点を置いているわけですね。田口さんのほうは、テッロージさんが危惧する身体的・感性的なものをむしろ重視し、そこを大事にしているんじゃないかなと思うのですね。ですから、テッロージさんが人間の理性を重視し、田口さんが人間のむしろ生理的な次元を重視することにより、異なる視点からこの文明災禍の時代の人間に対する批判的考察を展開しているというように捉えられると思います。この点に関してどのようにお聞きになったのか。恐らく意見の重なる部分があれば、違う部分もあるので、そこをお尋ねしてみたいというのが一つ。

2つ目はややSF的な話になりますが、ポストヒューマンなテクノロジーが更新する人間の条件についてお尋ねしたいと思います。人工知能が人間の条件を今後大きく変更する未来は予測できます。コンピューター技術の飛躍的進展を考えれば、そもそもコンピューター技術の発展に見られるように、人間存在にはもしかしたらテクノロジーそれ自体が実は制御不能だったとも捉えられるかもしれませんが、東日本大震災による原発事故を受けて、日本の人文業界ではハイデガーの『技術への問い』が改めて注目された時期がありました。この本の日本語訳は2013年に文庫化し、多くの人が手に取れるようになりましたが、その文庫版の解説者の方が、ハイデガーの『技術への問い』を原発事故の教訓として読むことを示唆していました。そこで述べていたのは、技術をコントロール不能な「思い通りにならない他者」と捉えることができるのではないか、ということです。つまり原発は安全なものではなく、必ず事故が起きるものなのだという観点から捉えることの必要性を問っていました。このことは人工知能システムにも当てはまるかもしれないと考えつつ、お話を伺いました。

テクノロジーが人間の存在様態をこれまででも変えてきたと考えれば、人工知能システムは人間の条件を完全に変えるようになると思いますが、このシステムはもはや当初から「思い通りにならない他者」として人間には統御不能なシステムとして予想されているわけです。私自身も、人工知能が人間に引き起こすと考えられる存在論的リスクは極めて深刻だと認識していますが、そうしたテクノロジーの進展と普及を押しとどめることができないとき、テクノロジーに対する警鐘の声は、残念ながら聞き入れられないと思います。

だとすれば、人工知能によって更新される人間の条件において、人間が人間性を今後失っていくという、そうした条件において人間がなお人間であり得るにはどうすればよいのか、そういうことも考える必要が出てくるのではないかなと思うんですね。あるいは、人工知能の出現で、もはや人類はかつての人類とは異なる存在になっているのかもしれない。こういうSF的な思

考実験についてご意見を伺えたらうれしいです。

ちょっと長くなりましたけれども、私のコメントはここで閉じたいと思います。ありがとうございました。

○土肥 中村さん、ありがとうございます。

今のコメントに対して、田口さんのほうから返答をいただきたいと思いますが、どうでしょうか。

○田口 中村さん、たいへん丁寧なコメントをありがとうございます。テッロージさんへのコメントも含めて、とても面白く拝聴しました。実は、まさに「ポストヒューマンなテクノロジー世界」や「SF的思考実験」といったトピックについて、発表の草稿には色々と盛り込んでいたのですが、時間内では話し切れないと判断したので、ぜんぶ省いたのです。そんなわけで、私が述べなかったことまで見透かされた感じがして、けっこう焦りました（笑）。

まず、「私たち」という主語について、鋭い問いかけをいただきました。ご指摘のとおり、今回の発表では、「私たち=日本国民」という意味で用いた場合と、「私たち=人間」という意味で用いた場合があります。中村さんが示唆してくださったように、「私たち」という主語は、厄介な問題を孕んでいます。この主語は、一方では「私」と「あなた」をある種の共感に基づいて囲い込みつつ、他方では「私たち」と「彼ら・彼女ら」の間に境界線を引き、「彼ら・彼女ら」を排除しようとするからです。私としては、このような「私たち」の両義性を踏まえた上で、「私たち=国民」や「私たち=人間」の盲目的な在り方を自己検証してみよう、という立場に立って、批判的な分析を心がけたつもりです。

ただ、「やっぱりツッコミは来るよね」というのが率直な気持ちです。実は、この数年間ほど論文を書きながら、まさに「私たち」という主語にジレンマを感じてきたからです。例えば、フランス語の論文を書いてフランス人に添削してもらおうと、「私」という主語はぜんぶ「私たち」に書き直されてしまいますよね。下手なフランス語を直してもらわなければならないから、文句を言える立場ではないんですが、色々と踏ん張って「私」の名において語ろうとした部分をすべて抹消されるのは、せつないものがあります。

では、今回の発表で「私」を主語にすればよかったのではないかと、言われそうですが、それはそれで難しかったのです。こういうジレンマは、一般的な回路の中で対象を論じようとする事に付きまとう問題なのかもしれません。私はこれまで、「私」の名においてのみ論述を展開するというのをずっと夢見てきたのですが、果たせぬままでした。今回のコメントをいただいて、これはまさに自分の課題なのだ、と再認識するに至りました。

次に、人間の過剰さという問題に関して応答したいと思います。中村さんが読み取ってくださったように、ポイントは、人間においては動物的な本能が壊れている、という点です。従って、人間本性を「動物」や「本能」との対照を通して捉えること自体、議論として成立しえない、という話になるわけです。ちなみに、「人間は発情期がない」という点に関しては、多くの論者が注目しています。一方、「食べる」というプリミティブな営みそのものに、動物との比較対照では説明のつかない人間の過剰さがある、という点は、自分でも困惑するような発見でした。とっくの昔に誰かが述べていることなのかもしれませんが、私自身にとっては、コロナ禍と向き合う中でこの問題に突き当たったことが、新鮮な発見だったわけです。

さて、中村さんからは、「人間の制御不能な過剰さは、文明災の根本原因なのか？」という問いかけがありました。核心を突く直球の問いかけにうろたえましたが（笑）、順を追ってお答えしたいと思います。まず、「人間の過剰さとは、アポステリオリな遡行を通して見いだされた文明災の前提条件である」とは言えるのではないかと、思います。現に、文明災によって、人間の在り方が如実な形で露呈するのだらう、と私は思うわけです。そして特に、そのように際立った形で浮き彫りになった人間の在り方を観察していくと、人間なるものはどうやら根源的に過剰な生き方をしている、と認めざるを得なくなるということです。

例えば、工芸品の装飾を機能主義的な観点に立って削ぎ落としていっても、最後の最後まで何らかの装飾性が残ったりしますよね。それと同じように、「人間なるもの」をどんどん生理的な諸機能の次元に還元していっても、最後の最後まで過剰性や幻想性、もっと言えば、独特の倒錯性が残ってしまうのです。つまり、その最後の最後まで残ってしまったものこそ、「人間らしさ」を考える上での前提条件になるのではないだろうか、と。そんなふうを考えてみたわけです。

ただし、留保すべきこともあります。それは、文明災の根本原因を一元的ないし決定論的に画定することはできない、という点です。文明災と人間本性をつなぐ因果関係は、多数の偶発的要素を取り込む形で、複線的かつ重層的に捉えられるほかない、と思うのです。実際、だからこそ、核災害と疫病禍という二つのカタストロフィを通して、この文明社会に内在する諸問題が連鎖的かつ累積的に顕在化するわけです。もちろん、テッロージさんが述べられたように、現代社会においては、この複線的かつ重層的な構造の総体が、世界資本主義の暴力性によって方向付けられている、という批判的認識を保持しておく必要はあると思いますが。

こうした話を踏まえた上でなら、中村さんがルソーについて投げてくださいだったボールを、私なりに投げ返せるのではないかと、感じます。ルソーの『人間不平等起源論』は、18世紀思想が産んだ最高傑作の一つだと思いますが、この作品のポイントは、人間の不平等の「起源＝根本原因」を「事実の歴史」に求めるのではなく、人間本性の仮説的な歴史に求めたところにある、と思うんですね。一体なぜ、人間と人間のあいだには、こんなにひどい「不平等」があるのか。ルソーはこのことを考えるために、いったん目前の惨憺たる社会的現実からは乖離した、純粹なる仮説上の人間形成史を想定してみようとしたわけです。ルソー自身が、「問題を解決できるという希望からではなく、問題の所在を明らかにして、本来の状態へと引き戻そうという意図」に基づいて、どこにも事実としては見当たらない「歴史」を構想してみた、と述べています。この発表を準備していた時にはまったく意識していなかったのですが、私が文明災の現状を踏まえた上で、アポステリオリな遡行を介して、人間本性の過剰さという仮説的起源にたどり着いたのも、こういう18世紀的な問題の立て方をなぞっていたからなのかもしれない、と気づきました。その意味では、この発見もまた、アポステリオリですが（笑）。

せっかく『人間不平等起源論』に言及していただいたので、一点だけ、私の発表のテーマに関わることを補足させてください。あの作品では、人間が自然状態を離れて社会状態を形成していく上で、いくつかの取り返しのつかない分岐点が記述されています。そのひとつとして「囲い込み」の問題があります。「囲い込む」とは、一体どういうことなのか。それは、本来何もなかったはずの場所に、後付けの理屈によって境界線を引いた上で、あちら側とこちら側、外と内、

敵と味方、といった区別を導入することです。このような区別の導入が、人間同士の「不平等＝差別」にとって大きな推進要因になっている、ということです。今でも「区別と差別は違う」などと述べる人はいますが、ルソーの観点ははっきりと異なります。「私たち＝人間」が「囲い込み」をする限り、差別の傾きはなくならない、ということなのです。

もう少し話を進めて、二つの点を注記しておきたいと思います。第一に、「囲い込み」によって、「こちら側＝内側」に属するものに対し、「私のもの」や「私たちのもの」といった所有権の論理が適用される、という点。第二に、こうした「囲い込み＝所有権」の論理は、何ものかを「閉じ込める＝隔離する」という行為と表裏一体の関係にある、という点です。近年の思想界のトレンドを見ていると、国内外を問わず、統治と主権の関係や、統治の手法について批判的に記述する人は多いように思います。ところが、「私的所有権」が統治権力によって保障されることで、いわゆる「市民生活」が成立しているという事実に注目する人はいなくなっていました。マルクス主義の衰退、ということと関係しているのだろうと思いますが、そこにある土や木というものを、あるいはその土や木が実らせたものを、「自分のもの」とみなすためには、法といったものとは別次元で、いくつかの暴力的な根拠づけが必要になるはずですが、そのことを正視せずして、この社会の「不平等＝差別」を捉えることなどできるのだろうか、と思ってしまう。

最近知ったのですが、ニワトリの群れというのは、檻に「閉じ込める」と、専制君主化したオスが弱いメスをターゲットにして虐待を始めるそうですね。魚の群れでも、水槽に「閉じ込める」と、海の中では行わなかったようなイジメが始まる、と聞きました。これは要するに、「囲い込む＝閉じ込める」という人間的な営みのうちに、「選別と排除」の傾きが宿っていることを示す如実な具体例なのではないでしょうか？ 興味深いのは、人間による家畜化＝管理が実施されなければ、野生動物たちは本来、そんな倒錯的な行為を取ったりはしない、ということです。「私たち＝人間」は、何ものかを「閉じ込める＝囲い込む」ことで、常に既に世界を加工してしまう。しかも人間は、そうすることで、自己自身をも加工してしまうのだろう、と思います。ルソーが、エンクロージャーを起点とするイギリスの第一次産業革命時代の動向をにらみながら『人間不平等起源論』を着想したのは、そういう人間とテクノロジーとの倒錯的な関係性に気づいていたからではないでしょうか。

こんなことばかり述べていると、私がベシミスティックに人間を全否定している、と捉える方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、私が強調したいのは、どんなにミクロな次元にまで遡行的に還元していったとしても、人間には動物と同じ水準には解消しえない「何か」があって、その「何か」のうちにこそ、人間らしい両義的なもの、つまり不可分な形で現れるほかない絶望と希望の源泉があるのではないかと、ということです。デイドロの『運命論者ジャックとその主人』ではありませんが、人間の善も悪も、幸福も不幸も、悲劇的なものも喜劇的なものも、美しいものも醜いものも、健康的なものも破壊的なものも、すべてが分割不能な形で一気に現れるほかないのではないかと、ということですね。人間が「人間らしく」生きるということは、人間独自の知性や技術のみが必要となるのではなく、それらを行行使するための不可避的な条件、すなわち汚染や破壊や殺戮といった過剰なる諸段階が、常に既に介在せざるを得ない、と考えるようになったわけですね。ある意味で、私が18世紀思想を通して学んだことの原点に回帰しただけなのかもしれませんが。

すでに相当長いお話しになってしまっていますが、アントナン・アルトーに関する中村さんのご指摘についても、最後に簡単に触れておきたいと思います。正直、アルトーの名前が出たときには、虚を突かれました。ただ、「食べる」という行為を分解してみよう、という発想について言えば、「我が意を得たり」という感触です。今後やってみようと思っているのは、いくつかのプリミティブな行為に関わる動詞のリストを列挙し、それらの動詞のあいだの関係性や、個々の動詞をさらに分解的に見ていった先に何が見えるのか、という点だったからです。そのとっかかりとして、大江健三郎や古井由吉、中上健次といった文学者が実践していた「体内感覚」の記述の問題に言及してみた次第です。スーパーヘビー級の文学者というのは、無意識レベルで、そういった思考を極限まで突き進めていたのではないかと、と思っています。

色々取り散らかしたような答えになってしまって、すいません。中村さんに剛速球を投げられて、おろおろしながら球を投げ返してみた、といった感じです。

○土肥 いや、いい感じですよ。中村さんはすごく丁寧な方だけれども、やるときはやるので、これでよかったです。では、テッロージさんのほうから、指摘に対し答えていただきますよう。

○テッロージ 田口さんのお話と合わせてでしたけれども、2つの問いがありました。

1つ目の質問ですが、人間らしさというが、本性はどこにあるかということですがけれども、直感であるとか、そういう動物的なものがそこにはある。そこで私は、人間本性というものをロゴスへとつないだわけです。

私がそう考えるのは、前提としてやはり踏まえておきたいのは、20世紀の前半ですけれども、ヨーロッパにおいては考え直しがありました。例えば現象学におけるメルロ・ポンティの議論です。抽象的な理性というものに対して身体的な価値というものを再び持ち直すということ、そういう議論でした。それが前提となって私の話ということになっています。だから、それ以前に存在したカントの観念主義においては、全く理性というものが抽象的でした。ですから、ヨーロッパでは身体というものが不在であった時代から、身体というものの価値の時代になって、うまくバランスを取ろうとしました。ですから、19世紀の実践的な考え方から現象学的な考え方に進んで、その流れの中で身体性というものを取り戻すということがなされてきました。

今、強くなってきているのは、特にアメリカで、アカデミズムにおいて、ハーバードを中心としますが、自然主義的な考え方です。そこにおいては、生理学的な範疇では、人間とはひとつの動物であるという考え方が強いわけです。ですから、いまわれわれは人間理性中心主義とは反対の考え方にいます。私の考えでは、その流れからポストヒューマンにつなげていくことに意味があるわけです。その動物学的なものの見方から、私が唱えるポストヒューマンを踏まえての思想があって、生理学的な状態から浮上してくる理性的なものが、人間であると言いたいのです。

ですから、動物学的や自然学的な物の見方をしている人たちというのは、例えば精神的なもの、宗教的なものに対する説明ができない状態にいます。そこで、古代の哲学者に戻って、人間というのは生まれからして違うものであるという、そこに話をつなげようとしています。その古代の人間の理性というものの見方が、その後の人類の歴史において制御不能になってくるわけですね。田口さんが過剰性と言ったのは、人類の歴史の流れの中で制御不能な状況が生まれてくるポストヒューマンというものと重なっているのではと思います。

今、人間を経済が支配しているとしたら、経済が基盤としているのは、人間の尽きない欲望であり、そこに立脚しているわけですね。だから、人間は、常にそれまで以上のものを望むようなものとみなされています。その人間が理性的な思考ができるとしたら、自らの捉え方を常にさらに欲するものとして捉えるかぎりにおいて、理性的な思考ができるということです。

実は古代ギリシアの人たちは、このようには考えていませんでした。こういうものが理性だとは考えていなかった。というのも古代ギリシアの理性というものは、自己制御ですから。私が先ほど言ったのは、アドルノによる機能的な理性です。ポストヒューマンというのは、理性の疎外から生まれるわけですが、ただども、ポストヒューマンが成りゆくものというのは、ハイデガーが言う計算する思考です。それこそがポストヒューマンだということです。

でも、古代ギリシアにとっては、人間の思考というものは観想なんですよ。今、たとえ話をしてみますが、コンピューターというものは計算するわけです。コンピューターは観想しません。考察しません。計算します。ですから、人工知能では、計算自体も計算の上に成り立っています。あらゆる可能性を計算するという上に成り立っています。ですから、先ほど言及のあった、ハイデガーによる計算する思考が、勝利する時代になっているわけですね。

では、計算する思考というものが、いま現在勝利しているとしたら、人間に残るものは何かといったら、もう感情だけです。人間というときに、個体というよりは集団の人間のことを私は想定しています。だから、何を取り戻さなきゃいけないかという、観想する力です。でないと、わたしたちは動物になってしまって、本能のみになってしまう。食べたい、食べたいというだけの動物になってしまいます。

これが私の1つ目の問いに対するお答えなんですけれども、残り15分ほどになってしまっていますね。けっこう難しい問題だったので、順序立てて答えなくてはいけませんでした。

○土肥 質問を受けないで終わっちゃうと失礼なので、1個だけでもいいから受けたいなと思いますけれども、質問ありますか。どこから入っていますか。Q & Aですけれども。用意していた方いますか。では、2つ目の問いに答えます。

○テッロージ 存在論的なリスクがあるにもかかわらず、それならば、自分たちはどうしたらいいのかということですね。

1つ目は、もはや動物状態にいることを受け入れるということですね。

もう一つは、超越的なというか、自分たちも人工知能のようになろうということ。

3つ目の答えもあります。3つ目は、自分が一番気に入っているものですが、サイバーパンク的というか、わかったといって受け止めて、批判的であろうとするということですね。そのままどまろうとするということですね。もうサボタージュしようということですね。

○土肥 では、田口さん、最後に話してもらえますか。あまり時間がなくなってきましたが。

○田口 どうもテッロージさんが誤解しているようなので、一言だけ、補足させてください。私は別に、動物行動学の観点に立って人間の行動を分析したわけではないです。人間の行為を極小の次元まで還元していても、「動物的な本能」という切り口では捉えられない過剰さが残ってしまう、と述べたのです。テッロージさんの話では、「食べる」という行為は、単なる動物的な営みとして定義されています。しかし、その捉え方には、どうしても違和感があります。私の考察では精神的なものや宗教的なものを説明できない、とテッロージさんはおっ

しゃるのですが、どうしてそういう受け止め方になるのか、よく理解できません。私としては、動物的な水準には還元しえない過剰さに注目することで、例えばヴァレリーが指摘したような、科学や芸術や文化といった様々な精神的な営みまで視野に入れることができる、と述べたつもりです。たぶん、私たち二人のあいだで、問題へのアプローチが異なっているので、話が噛み合っていないのではないかと感じます。

ところで、テッロージさんに質問があります。ご発表の最後のほうで、「必然的に来るものの到来を遅らせる」とおっしゃっていますね。ここでの「必然的に来るもの」というのは、「世界の終わり」のことでしょうか？

○テッロージ むしろ、人間の終わり、だと。

○田口 なるほど、「人間の終わり」。では、「人間の終わり」と「世界の終わり」とは、どのような関係にあるのでしょうか？

○テッロージ 「人間の終わり」は「世界の終わり」ではありませんね。動物もいますから。

○田口 私が、小松左京の『復活の日』に注目したときに自問していたのは、「人間」も「世界」も、実は既に終わっているのではないか、という疑問でした。奇妙に聞こえるかもしれませんが、そのような「終わり」の中でも、「よく生きる」ことは可能なのか、そして可能だとすれば、それはどのようにしてか、ということを考えていました。テッロージさんは「すべての可能なもの」を計算するのが人工知能の思考だ、とおっしゃいましたが、人間の過剰さは、自分でも予想しないことをみずから可能性として切り開いてしまうところにもあるのではないかと私は思っています。もちろん、その過程においては、人間自身を脅かす怪物的なものまで作り出してしまう、という両義的な問題が消せないわけですが。

ちなみに、「世界」も「人間」も既に終わっているかのように見える状況下においても、いまだに「何ものか」が残っている、という小松左京的な感覚は、私にとっては「文学」と呼べるものです。妄想と言われれば、そうかもしれないけれども、どんな状況下にあっても、予測不能な未来を呼び寄せてしまうという人間の内在超越的な過剰さは残留しつづけているのだ、と言えるよいのでしょうか。私は『脱原発の哲学』を書いていたとき、「もはやこの国も、この世界も、終わった。いや、自分が気づくずっと前から、実は既にして終わっていた」という感覚に取りつかれていました。ただ、それでもまだ、私たちは生きています。凄まじい生き地獄のような原発事故を忘れていくというのは、数年前までは許しがたいことだと思っていたのですが、「そのような人間自身の在り方もまた面白い」というか、「とにかく、人はこのようにして生きていくのだ」という身も蓋もない感覚に、最近では着地できるようになりました。我ながらうまく言語化できていないのは歯がゆい限りですが、人間の過剰さこそが、可能なものの領域を切り開けるのではないかと、という観点には拘ってみたいところです。

○テッロージ 人間の終わりというのは二通りの解釈があると思います。本当に人間が終わるのか、あるいは全く違うものになってしまうのかというどちらかです。世界の終わりも同じように、二通りあると思います。自然災害で本当に世界が終わってしまうということもあり得るし、もう人間次第なんですけれども、人間がこの世界はもうなくなってしまったと思ったら、そこで世界は終わるんです。これは文化人類学者のデ・マルティーノが言ったことなんです。

○土肥 本当、われわれだけで話してしまっていて、何か尽くせないものがありますけれども。

○田口 すいません。ひとつだけ、チャットにとっても濃密なコメントが届いていますね。

○土肥 来てますね。東京都立大学の西山雄二さん。入念な評価をいただきまして、ありがとうございます。

「コメントです」ということですので、一息に読ませていただきます。

「人間の過剰さや幻想性は人間の根本的な本性で、結論ではなく前提であって、その自覚のゆえに宗教的な統制が生み出されたのかもしれない。超越的な原則による世俗的な欲の制限、人新世において失われたのは、そうした制約で、近代世界において加速した過剰さや幻想性が今日の危機、文明災を引き起こしています。

人間の救済のために人間は無限に人間を超えていく（パスカル）としても、パスカルが前提としたように、その先にある神学的な次元は現代においてもはや見当たりません。もはや外部がない世界で互いの利害を争う現代は、貧富の格差を膨張させ、生存競争を激化させています。政治的権力による介入や統制でも不十分で、むしろ様々な問題を残します。私たち一人一人の精神をあえて孤立させ、過剰さに制限を課す畏怖の念はいかに生じて、持続的に機能するのでしょうか。しかも同時に他者との接触感染に気をつけろという孤立の命法とは異なる仕方で互いの連帯を結び直すには、これほどまで人間の誠意に対しては文明災のようなショック療法が必要なのかとさえ感じてしまいます。ただ、人間の健忘症的楽観的レジリエンスも強力です。そうした弱者に負荷がかかる悲劇的な手段ではなく、畏怖の念を感じさせる契機として、人文知がいまだに役割を果たすと考えていますので、本日の会は有益でした。」

○田口 西山雄二さん、わざわざ参加してくださり、ありがとうございます。何よりコメントのひとつひとつが的確なので、感謝します。これこそ、まさに私が言いたかったことなのだ、と思いました。「じゃあ、最初からそう言えよ」という話ですが（笑）。

○土肥 代弁いただいたということで。

○田口 自分の話はわかりづらかったかな、と反省していたのですが、西山さんの生産的なコメントを読んで、ほっとしています。

○土肥 助かりました。

○田口 明晰かつ発展的に、問題を捉え直していただいた、という感じです。

○土肥 非常に貴重なコメントでありがたかったです。まとめていただきました。こうしている方々に助けをいただきながら、今日の会が成り立っています。僕も本当は助けられました。僕自身はあまり話せませんでした。それ以上に有益なことが聞けている、という気持ちのほうが強く、ここまで来てしまいました。

支えてくださった方々のなかで、特に手話通訳のお二人に感謝申し上げたいと思います。内輪ですが、国際言語文化研究所の事務局の方々、それから技術者の方々、多くの方に関わっていただきここまでこれました。支えていただく、支え合っていく、そうしてこのような話ができるというありがたさを、4回の連続講座の終わりに感じております。